

部活動を通じた社会人基礎力に関する研究

～高知工科大学硬式野球部を対象に～

1210534 前野 紘輝

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 概要

現在、体育会学生を取り巻く環境が大きく変化している。一昔前であれば大学進学は、学力の高い人だけ研究や勉学に励むというものであった。しかし近年では、学力が高くなくとも高校の部活動の実績のみで大学進学が可能なものとなった。それがスポーツ推薦入試である。偏差値が低くとも、スポーツさえ出来れば進学することも可能となった。スポーツ推薦入試は、アスリートとしてのキャリア形成に寄与してきた一方で、学力の軽視が引退後に悪影響を及ぼすことも注目されている。

例えばオリンピックに出場するような競技力の高い、素晴らしいスポーツマンであったとしても、いつかは引退を迎える時がある。菊(2018)によると、あるスポーツで実績を残してきたトップアスリートの多くが、引退と同時に職と生活の基盤を失うことが一般的である。このような、アスリートの引退後のキャリアのことをセカンドキャリアと呼び、アスリートが引退後も何らかの形で活躍することができるよう、様々な支援が行われている(相原・伊吹, 2014)。プロサッカーリーグ(以下Jリーグ)では年2002年からセカンドキャリア支援を実施しており、キャリアスポーツセンター(以下CSC)の設置もされた。また日本のプロ野球機構である日本野球機構(以下NPB)においても2012年より現役若手プロ野球選手に対して「セカンドキャリアに関するアンケート」を実施している。更には2014年から、転職応援サイト「イーキャリア」などを運営するSBヒューマンキャピタル株式会社と、NPBに所属している12球団の現役日本人選手で構成される一般社団法人日本プロ野球選手会は、引退後のプロ野球選手のセカンドキャリア支援サービス「イーキャリアNEXT FIELD」をスタートさせた。現在のプロスポーツの世界でもキャリアについて考える時代になってきていることが分かる。

では、アマチュアスポーツである大学スポーツでは、ど

の様なキャリア教育が行われ、体育会学生は周囲からどのような印象を持たれているのだろうか。

まず大学スポーツでは2019年に一般社団法人大学スポーツ協会(以下UNIVAS)が発足した。UNIVASとは大学スポーツに係る大学横断的かつ競技横断的統括組織のことである。今回の研究対象である高知工科大学もUNIVASに加入している。さらにUNIVASではデュアルキャリア委員会を設置している。UNIVASでは、キャリアを人生全般と捉え、大学スポーツにおける「デュアルキャリア」とは学業、競技活動などを通じて自身のキャリアをより豊かにするために取り組むことを意味すると定めている。つまりUNIVASでは、学生アスリートがただ単に競技をするのではなく、キャリア形成を行わなければならないことが強調されているのである。

また、体育会学生に対するキャリア教育の必要性を改めて考えさせられる事件がこの数年間で起こっている。2018年に、日本大学アメリカンフットボール部の悪質タックル問題が世間で話題となり、更に2020年には朝日大学硬式野球部のホームレス殺傷事件、東海大学硬式野球部の大麻使用事件など、多くの人が注目を向ける体育会学生の事件が発生した。またそうした事件性のあるものだけでなく、身近にもスポーツ推薦で入学した体育会学生の学力低下(小野ら, 2017)など、課題が報告されている。

一方で、一般的には体育会学生は優秀とされているのも現状である。葛西(2012)によると、体育会学生は経済産業省が定める3要素12項目からなる社会人基礎力が高く、企業も積極的に採用を行っていることが報告されている。更に、萩原ら(2017)によると、大学での運動部活動経験が社会人基礎力の形成に影響があることが明らかにされている。このような研究結果からも、体育会学生が部活動を通じ、社会人基礎力を身に付けられているという実感を持っているのか、またその要因について検討していくことは今後も重要になってくる。体育会学生にとっての部活動を、競技で結果だけ残す

ためのものではなく、一生必要となる力を身につけるキャリア教育の場にするための検討を行うことが必要となってくる。

さらにこの問題は私立大学の話だけではなく、国公立大学でも起こり得る話である。今回の研究対象となる高知工科大学も、スポーツ推薦入試(A0入試)を実施しており、スポーツ成績が優秀な学生が入学しやすい入試を用いている。そのため、一般入試で合格してきた学生と比べて、学力は低くなる可能性が高い。その為、学修支援なども含め、高知工科大学でもキャリアの対策が必要であると考えられる。

2. 目的

本研究の目的は高知工科大学硬式野球部に所属する部員が、部活動を通じて社会人基礎力がどれほど身に付いたと感じているかを明らかにし、社会人基礎力を向上させるためのキャリア教育の必要性について検討することである。

3. 方法

本研究の対象は、高知工科大学硬式野球部の学生であり、監督、総監督にもヒアリングを行った。高知工科大学硬式野球部は1997年に創部し四国地区大学野球連盟に所属している。2015年の四国地区大学野球春季リーグ戦(以下春季リーグ戦)にて1部リーグに昇格し2018年四国地区大学野球秋季リーグ戦(以下秋季リーグ戦)にて初優勝した。また翌年の2019年春季リーグ戦に優勝し、創部初となる全日本大学野球選手権大会に出場。1回戦にて阪神大学野球連盟に所属している大阪体育大学に惜しくも延長戦のうへ敗れるも、強豪大学相手に善戦したことから、全国でも名を残した。また2020年には春季リーグ戦は新型コロナウイルス感染症の影響を受け開催中止となったものの、秋季リーグ戦では優勝し、高知工科大学硬式野球部は四国地区大学野球連盟において中心的大学となっている。

本研究では、高知工科大学硬式野球部に所属している学生のうち同意を得られた74名に対してアンケート調査が行われた。またアンケート調査を基に、高知工科大学硬式野球部の監督、総監督にヒアリング調査を行った。アンケート調査期間は2020年8月23日から9月11日であり、googleフォームを用いたweb調査を実施した。ヒアリング調査は

2020年12月14日から12月15日であった。回答を求めた項目は以下の通りである。

3-1. アンケート調査

- ①個人的属性項目：学年、性別、部活動内での役職、競技歴を求めた。
- ②社会人基礎力尺度：経済産業省が定める定義に基づいて評価項目を作成し、5件法で回答を求めた(1：全く身に付かなかった-5：非常に身に付いた)。本研究における社会人基礎力とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力と12の能力要素から構成されており、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力として、経済産業省が2006年に提唱したものを引用する。

3-2. ヒアリング調査

- ①全体結果：12項目の結果を受けて上位項目、下位項目の要因について回答を求めた。
- ②学年別結果：12項目について学年別に比較した時に差があった学年の要因について回答を求めた。
- ③キャリア教育の必要性：今回のアンケート結果を基に今後のキャリア教育についての課題や必要性に関して回答を求めた。

4. 結果

4-1. アンケート調査

4-1-1. 個人属性

これより個人的属性項目の結果について述べる。

高知工科大学硬式野球部では、3年生が最も人数の多い結果となった。4年生については2020年秋季リーグ戦まで現役であった者のみにアンケート調査を行ったため、入部当時の人数より少ない結果となった(表1)。性別については女子マネージャーが4名所属している為、男性70名、女性4名という結果となった(表2)。役職については選手69名であり、そのうち1名は主将、3名が副主将であった。また裏方と呼ばれる、学生スタッフとしてはマネージャー4名、学生コーチが1名であった(表3)。競技歴は、最も短い者が1年、一番長い者が17年であった。また最も多い競技歴数は

10年の17名であった。更に、10年未満の部員が12名、10年以上が56名、無回答が6名という結果となった(表4)。

表1. 学年

項目	度数	%
1年生	30	40.5
2年生	9	12.2
3年生	26	35.1
4年生	9	12.2
合計	74	100

表2. 性別

項目	度数	%
男性	70	94.6
女性	4	5.4
合計	74	100

表3. 役職

項目	度数	%
選手	65	87.8
主将	1	1.4
副主将	3	4.1
学生コーチ	1	1.4
マネージャー	4	5.4
合計	74	100

表4. 競技歴

項目	度数	%
1年	1	1.4
4年	1	1.4
6年	1	1.4
7年	1	1.4
8年	3	4.1
9年	5	6.8
10年	17	23.0
11年	5	6.8
12年	8	10.8
13年	10	13.5

14年	9	12.2
15年	5	6.8
16年	1	1.4
17年	1	1.4
無回答	6	8.1
合計	74	100

4-1-2. 社会人基礎力尺度

全体結果について

12項目とも平均して高い数値を記録した。上位項目は、規律性(4.39)、課題発見力(4.30)、状況把握力(4.23)である。下位項目は、発信力(3.89)、想像力(3.95)、計画力(3.99)などであった。12項目中9項目は4以上とかなり高い水準となっている。下位項目も3点代ではあるものの高いものとなっている。その為、統計学的に差がある項目はないという結果であった(図1)。

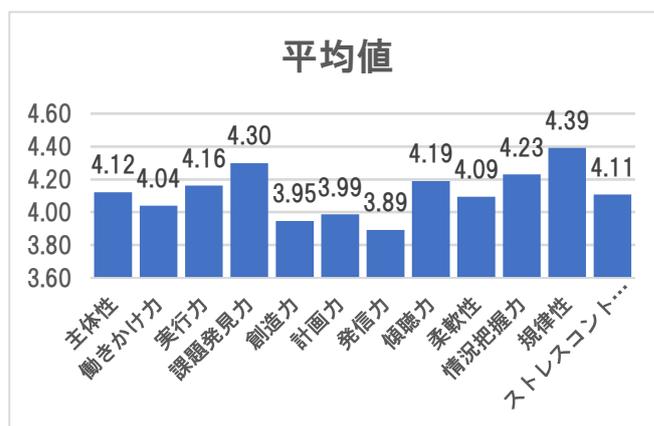


図1 社会人基礎力全体の平均値

学年別比較

12項目の平均値について学年別で算出した。全体結果として統計的な差は認められなかった。しかし学年別で各項目を比較すると12項目中7項目で有意差が確認された。有意差の確認された7項目は実行力、課題発見力、創造力、計画力、傾聴力、柔軟性、状況把握力であった。これらの項目では全て2年生が低いという結果であった。

(図2~13)

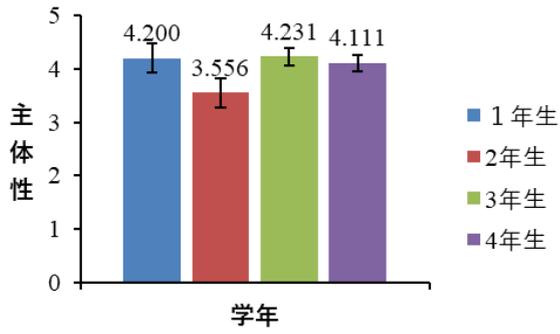


図. 2 主体性

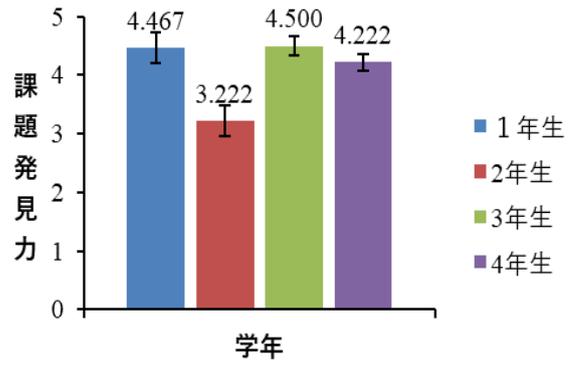


図 5. 課題発見力

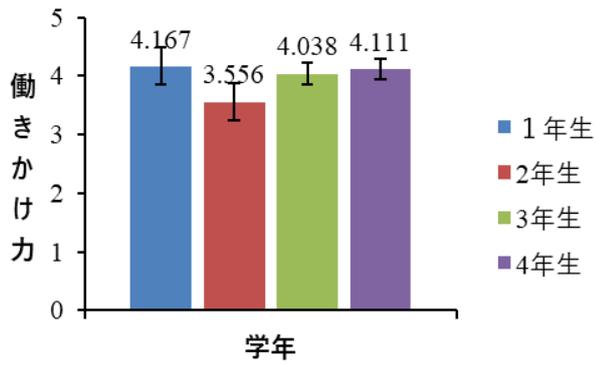
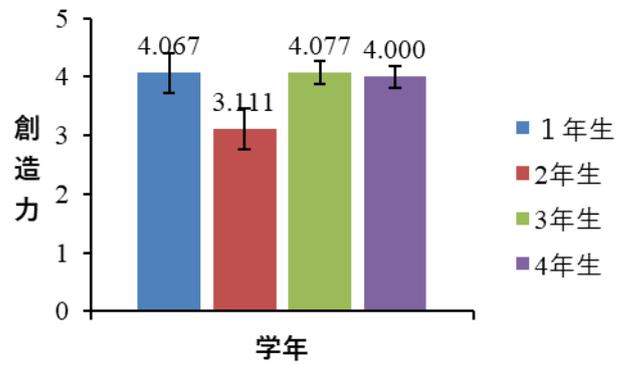


図. 3 働きかけ力



6. 創造力

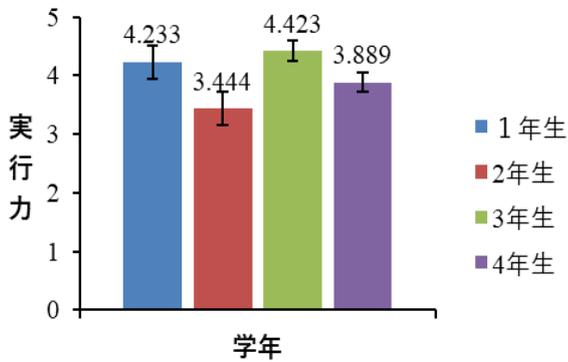


図. 4 実行力

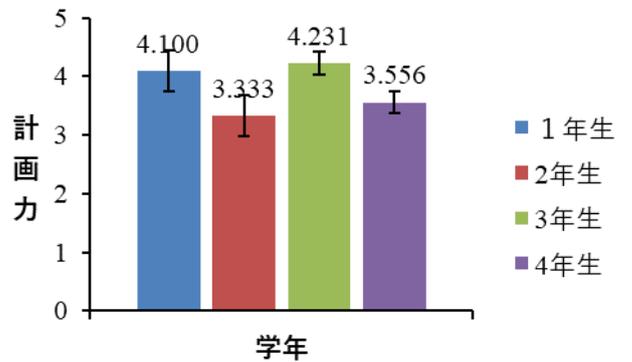


図 7. 計画力

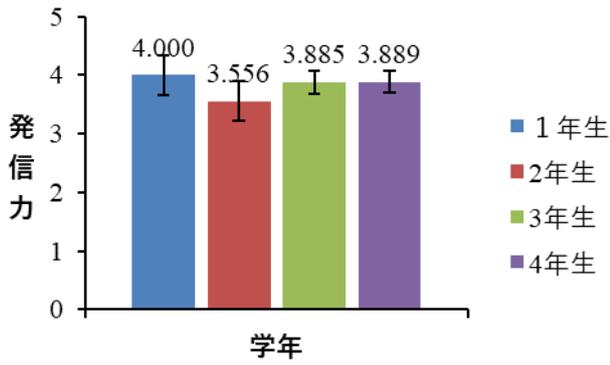


図 8. 発信力

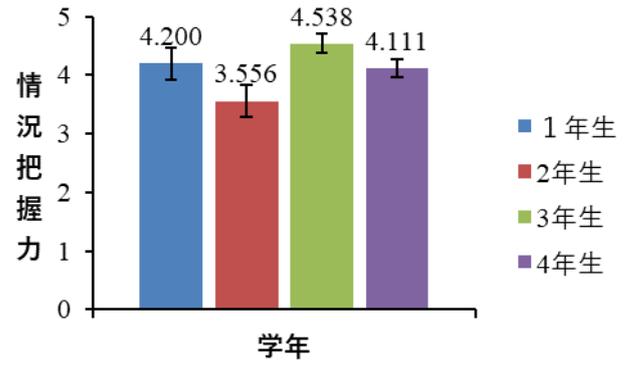


図 11. 状況把握力

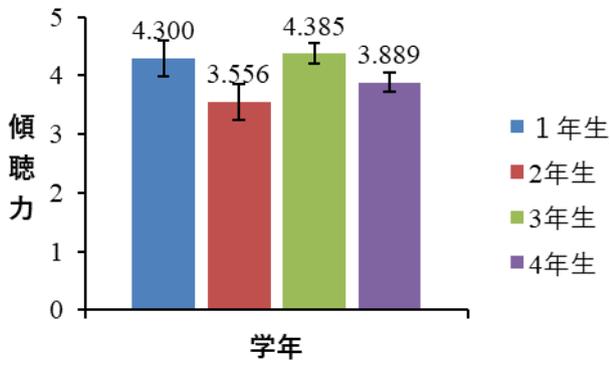


図 9. 傾聴力

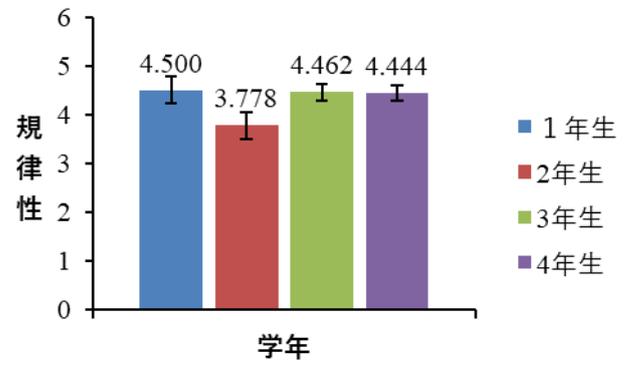


図 12. 規律性

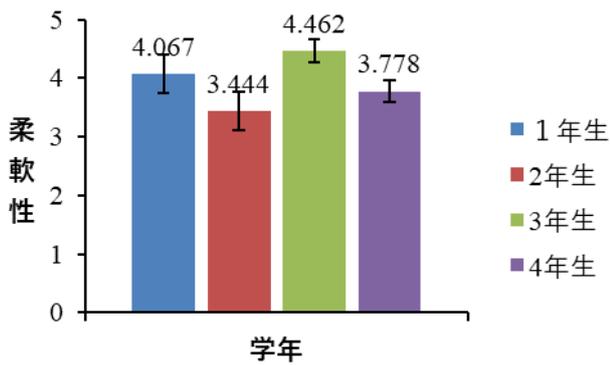


図 10. 柔軟性

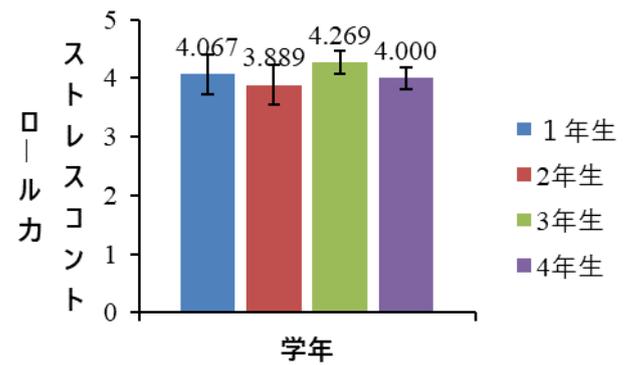


図 13. ストレスコントロール力

4-2. ヒアリング調査

4-2-1. 全体結果について

アンケート結果をもとに、総監督および監督へのヒアリング調査を行った。まず、比較的高い値を示した規律性、課題

発見力について、総監督は以下のように語った。

規律性については、大学まで体育会の野球を続ける学生の多くは小さい頃から野球をしており、高校を卒業するまでに指導者の多くが厳しく指導していると考えられる為、そもそも大学の部活動をする前から身についていると考えられる。課題発見力については、高知工科大学のような公立大学においては、授業があるため練習時間が短くなっていく。その為、自主練習の時間が多くなり、自分たちに何が足りてなくて、何が必要かを普段から考えて練習している為、身についていると考えられる。更に大学野球においてレギュラークラスの実力を身に付ける為には、自主的な練習をしないといけない。そのポイントも影響していると思われる。

規律性をはじめとして、社会人基礎力は大学だけでなく、その前のキャリアから培われていくものであるが、自主練習などの工夫によってさらに伸ばすことが出来る可能性があるということであった。

また下位項目である想像力、計画力、発信力以下のように語った。

想像力、計画力はそれぞれ、学年が上がるに連れて、身についてくるものではないかと考える。練習内容を任せられるようになり、チームの方針を立てていくようになるため学年が上がるにつれ身につくのではないかと考える。また発信力については、主将や副主将、主務などの役職をもっており、普段の練習から意見を伝える機会が多い者が身に付けているものである。さらに、高校野球時代などに主将、副主将経験がある部員にも、発信力が身につけているのではないかと考える。

下位項目については、学年及びリーダー経験などが関係していることが示された。学年やリーダー経験など、関係なく身に付けるための必要があるという結果であった。

また監督によると監督による、部員の規律性および課題発見力についての見解は以下の通りである。

規律性については、実際に身につけているというよりも、スポーツマンであれば、野球部に所属しているのであれば、身に付いているだろうというイメージがあるから最も高い項

目になったのではないかと考える。

課題発見力についても、練習内容が、指導者から押し付けて行くものではなく、自主的練習、選手同士で考えた練習を行っているから、一人一人が身につけているというのではなく、高知工科大学硬式野球部であれば身につけているであろうというイメージが強いため、規律性に次いで上位項目になったのではないかと考える。

スポーツを通して、身につけているだろうとされているイメージが今回のアンケート結果に及ぼしているということであった。イメージだけでなく、実際に身に付いているかの調査が必要になるという結果となった。

下位項目である計画力、創造力、発信力については、以下の通りであった。

イメージと実際のギャップがあるのではないかと考える。課題を発見するところまでは大丈夫だとしても、その次の課題に対しての取り組み方がイメージは出来ているが、実際に動いたときに、見通しを立てた計画を作ることが出来ず、動きに出来ないことが多い印象がある。その為、自信が持てず発信できないことに繋がるのではないかと考える。

下位項目においては、イメージと実際のギャップを指摘した。課題発見力は総監督が指摘した通り自主練習などにより、身につけていく可能性があるものであるが、監督のいうように、具体的な次の課題解決に向けた取り組みをしていく必要がある。

総監督と監督からのヒアリング結果は、上位項目については、総監督、監督とも、似た見解を示唆した。しかし下位項目については、総監督は学年の問題を指摘したのに対し、監督はイメージと現実の違いを指摘し、異なる結果となった。

4-2-2. 学年別比較について

学年別比較についても、それぞれの学年の特性についても、総監督、監督にヒアリングを行った。まず、総監督は以下のように語った。

2019年の全日本大学野球選手権大会に出場したことが今

回の学年の有意差が発生したものと考える。2018年秋季リーグ戦に初優勝し、2019年の春季リーグ戦で優勝し全日本大学野球選手権大会に出場した際にチームの中心にいたのは昨年卒業した代と、今の4年生であった。また3年生はその姿を見ており、自分たちも先輩たちようにならなければいけない自覚と責任を覚えたと思う。また全日本大学野球選手権大会に出場したものの、ベンチメンバーに選ばれず悔しい思いをした部員が3年生に多くいた。更に、1年生は全日本大学野球選手権大会での高知工科大学を見て、全日本大学野球選手権大会が憧れの舞台ではなく、現実には叶えられる目標だと感じ入学してきた世代であり、もともとの目標設定や能力値が高いと思われる。しかしながら今の2年生においては、入学後すぐに全日本大学野球選手権大会へ出場する経験をし、何も身に付けることもなく一番の目標を体験した。その為、2年生はちょうど、ギャップの世代のため低いのではと考える。

部活動を通じての取り組みや、一人一人の能力の問題だけではなく、入学時期のタイミングも、影響を与えているという結果が示された。入学時期のタイミングが社会人基礎力に影響を与えているのであれば、今後もそのようなタイミングの可能性が発生した時の解決策を検討すべきではないだろうか。

一方、監督の学年別の比較に関する見解は以下の通りであった。

まず2年生の社会人基礎力が比較的良かったことに対して、挙げられる理由としては、人数が少ないことである。人数が少ないと、一人の値が小さいことが学年全体の平均値が大きく減少してしまう。

次に挙げられることとしては、他の学年に比べ、一人一人のパーソナリティが未熟かなと感じる。また影響を与える人間が少ないと感じる。3年生と比較したときに、リーダーシップを持った数人が、下にいる部員を引っ張って底上げをしている印象があるのに対して、2年生は、引っ張っていかうとする部員がいない。また誰かが引っ張っていかうとしても、ついていかうとせず、バラバラに動いているイメージがある。だから、3年生と比較すると、底上げが出来ず、差

が出ているのではないかと感じる。

監督の意見は総監督とは異なり、一人一人のパーソナリティを指摘した。一人一人のパーソナリティを向上させる教育が必要になるのでないかという見解であった。

これらの結果より、総監督は入学時のチーム状況やチームの節目のタイミングなどを指摘した。一方、監督は2年生全体の資質の差や、リーダーがいないことを指摘した。二人の見解は異なるものではあったが、2年生の低い要因となる見解であったと考えられる。

4-2-3. キャリア教育の必要性

キャリア教育の必要性についても、これからの課題や、していくべきことについても、総監督、監督にヒアリングを行った。まず、総監督は以下のように語った。

社会人になるうえでこれからポイントになるのは働きかけ力が大事になってくるのではないかと考える。自分が大学事務職員の採用や人事業務に、携わっているうえで、一人で仕事をこなそうとする者が多いように感じている。もっと周りに頼ったり、相談すればよりスムーズにこなせたり、より良いものを作ることが出来るのではと感じること機会が多くなったと思う。その為、今の野球部員にはもっと周りを巻き込んでいく力、今回の項目であれば働きかけ力を身に付けるようにしていきたい。

今回の結果を踏まえると、キャリア教育というより、もっと知識を身に付けることが必要だと思う。今の野球部をみていると感覚や感性でプレーしている部員が多数である。一つのプレーに関して、なぜこの動きをすればこのようなプレーになるのかという、基礎的な知識がないと感じる。長年、野球をしているが圧倒的知識が足りていないと思う。その為、基本的な知識や理論を身に付ける習慣を、野球を通じて身に付けさせていきたいと思っている。

今回の社会人基礎力尺度にもあった働きかけ力がポイントになることが示唆された。部活動を通じての働きかけ力は、練習の取り組みで向上するのではないだろうか。また、取り組みだけでなく、知識や理論を身につけることが、社会人

基礎力を伸ばす可能性があるということであった。

一方、監督のキャリア教育の必要性に関する見解は以下の通りであった。

野球部に所属している際はチームスポーツであるが、就職活動を含めた引退後については個人の勝負になる。チームであればしっかり動けるが、個人になったときに動けなくなる学生が多い。今回のアンケート結果からもわかるように、状況を理解し、課題を見つける力、スポーツマンらしい規律性は、何もしなくても自然と身に付けることが出来る。しかし、その後の、先を見据えた計画、課題をクリアにするために何をしなければならないのか、またそのことについて周りに伝える力を、まずは、野球を通じて身に付ける必要があると考える。そして、その一連の流れを、野球から就職活動やキャリアに置き換えて、考えることが出来るようにしていけば、スポーツを通じたキャリア教育になるのではないかと考える。

また、もう一つの考えとしてはスポーツという考えを切り離れた教育が必要なのではないかと思う。野球部員から野球というものを切り離れた際に、その学生には何が残るのかを考えさせることも重要であると思う。野球をしていれば、就職活動や社会人基礎力は高いから大丈夫と考え、野球しかなければいいやと考えてしまう。そうなった際に、社会人になった時に、野球を通じ得た力を発揮することが出来ることもあるが、それ以外に必要な力は多くあり、そうした力を持っているものが、社会においては活躍する姿を実際に多く見てきた。その為、野球を含めたスポーツはプラスアルファであるという考えをもって、スポーツを切り離して、スポーツで得た力を他の力に変えていくことが大切だと思う。そのような教育を行っていけば、良いと考える。

チームスポーツを切り離れたときに、一人一人の能力が発揮されないことが示唆された。どんなにチームで優れた能力が発揮できたとしても、一人になった際に発揮されなければ、本当に身に付いているとはいえない。そうした課題を解決するためのキャリア教育が必要になることが示唆された。

これらの結果より、指導者2人ともキャリア教育については、必要であると示唆した。キャリア教育の内容について

は、総監督は働きかけ力の必要性や知識を身に付けることなどを指摘した。一方、監督は、全体で低い結果となった、創造力、計画力、発信力の向上について指摘した。異なる結果ではあるものの、キャリア教育の必要があることについては一致するものであった。

5. 考察

アンケート調査では、まず野球部全体としては、社会人基礎力12項目において、平均的に高いことが明らかになった。しかしながら、学年別で比較すると、2年生は12項目中7項目において統計的な有意差が確認された。また2年生がすべての値において有意に低いことが明らかになった。

ヒアリング調査では全体結果の上位項目、下位項目についての要因、2年生が低い値を示した要因、キャリア教育の必要性や今後のキャリア教育の方法を調査した。その結果、上位項目の要因としては、自主的練習を行っていること、小さい頃から野球をしていて身につけていること、野球部に所属していると身につけているというイメージがあることが要因であること示唆された。下位項目の要因については、学年が上がるにつれて身につくこと、リーダー経験があること、イメージと現実のギャップの差や自信の無さが要因であることが考えられる。

2年生が低い要因としては、全日本大学野球選手権大会に出場による、学年間の価値観やギャップがあること、一人一人の質の差、人数の少ないことが、要因であることが明らかになった。

キャリア教育の必要性については、学生自身が働きかけ力を身に付けること、野球によって知識や理論を身に付ける習慣化させること、学生自身がスポーツで得た力を他の力に変えられることになること、指導者が課題発見から解決までの流れをクリアにする力を身に付けるように指導すること、が必要である。

本研究の目的は部活動を通じて社会人基礎力がどれほど身に付いたと感じているかを明らかにし、社会人基礎力を向上させるためのキャリア教育の必要性について検討することであった。

高知工科大学硬式野球部に所属している学生は、社会人基礎力12項目において、平均値で見ると、どの項目において

も高い数値であり、身につけていると感じている学生がいる。しかしながらその力は、大学での部活動を通じて身に付けたものではなく、幼少期からスポーツを続けてきたことで身に付いたものであると考えられる。特に規律性においては、野球選手は幼少期から挨拶や競技中の姿勢などについて厳しく指導される傾向にあるため、本研究の対象となった部員も例外ではなく、大学野球より前から身に付いていることが考えられる。また、元々身につけていた力が、大学で野球を続けたことにより、更に成長する要因になったことも考えられる。特に課題発見力や状況把握力においては、その例ではないだろうか。高知工科大学硬式野球部は選手同士で練習を考えて行っていることにより、課題発見力、状況把握力が大きく身についた可能性がある。しかしながら、そこで発見した課題に対しての解決能力は、低いのではないだろうか。挙げられた課題に対して、解決する為に創造し、計画を立てる力が、学年が低い時から身につけることにより、知覚する社会人基礎力が向上していこう。また、発信力については、日頃の練習から、自分の考えや練習の取り組み方に対して発言する機会を作ることで向上する可能性があることが本研究結果からわかった。

続いて2年生の社会人基礎力が他の学年のものと比較した際に低かった結果に関しては、指導者に対するヒアリング結果にもあった通り、人数の少なさや一人一人の資質や能力に関係していること、全日本大会出場に出場したことが関係していることもわかった。特に人数が少ないことや、一人一人の能力が低いことは、現在の2年生に限らず、今後もそのような学年が出てくる可能性があるため、教育をしていかなければならない。また、全日本選手権大会への出場が影響を与えていることに関しては、確かに影響を与えた要因になると考えるが、入学後すぐ初出場を果たしたことが大きく影響を及ぼしていると考えられる。今後、チームを強化し、全日本選手権大会への出場が当たり前であるチームにしていくことで、学年間のギャップは生まれなくなるのではないだろうか。

最後にキャリア教育の必要性については、まずは部員自身が現在、身に付いていることをもう一つ上の段階に成長させることが重要であることがわかった。部活動は社会人基礎力の向上に大きく関係しており、課題が発見できれば、次のス

テップに進むために課題を解決するために、創造し、計画し、実行するという一連の流れがある。その点においては、部活動も社会も一緒であるため、この一連の流れを大学生時から、習慣化することが重要である。今回の研究により、高知工科大学硬式野球部は課題を発見する力は秀でていることが明らかになった。しかし一方で、そこから先の様々な社会人基礎力が足りていないことが分かった。その課題を解決するために、まずは知識や理論を身に付くように教育していくことが必要である。更に、普段の練習において、選手間においての意見の交換をする場を設け、発言する機会を与えることが必要だということがわかった。そして、選手同士で働きかけることにより、チーム力は上がり、選手個人の能力も上がり、部活動を通じたキャリア教育となるのではないかと。さらに、スポーツはキャリアにおいてプラスアルファであるという考えを指導者がしっかりと指導し、部活動を通じ、得た力を他の力に変える機会を与えていく教育が必要であることが分かった。

6. 結論と今後の課題

本研究では、部活動を通じて社会人基礎力がどれほど身に付いたと感じているかを明らかにし、社会人基礎力を向上させるためのキャリア教育の必要性について検討した。本研究では、目的を達成するため、高知工科大学硬式野球部に所属している学生にアンケート調査、指導者2名にヒアリング調査を行った。アンケート結果、全体の平均値は高く、12項目中、規律性、課題発見力が高く、創造力、計画力、発信力は低い結果であった。また、2年生の平均値は他学年より低い結果であった。今後の部活動を通じてのキャリア教育については、課題発見から課題解決及びチームへの働きかけに重きをおいた指導が必要になることが分かった。またそのために、知識、理論を身に付けるよう指導し、部活動を通じて得た力を他の力に変換する指導教育が必要になることがわかった。そうした教育や指導が、社会人基礎力の向上に繋がるのではないだろうか。

本研究の限界としては、調査対象が一大学の一部活動のみの学生であったことである。またアンケート調査についても、学生の自己分析であり、客観的にみてそれぞれの社会人基礎力が本当に身に付いているのかは判断出来かねるもので

あった。今後は、企業や他大学、大学の就職支援課や教授などに、学生がどの程度、社会人基礎力が身に付いているかをヒアリングするなどして比較・検証していく必要がある。

<https://kutbaseballclub.wixsite.com/kutbaseballclub/blank-1>

謝辞

最後に本研究を進めるにあたり、アンケート調査にご協力頂いた高知工科大学硬式野球部、2名の指導者、本研究について指導していただいた前田助教の皆様に、この場をお借りして御礼申し上げたい。

引用文献

- [1] 菊幸一 トップアスリートのセカンドキャリア「問題」の構造ととらえ方
- [2] <https://www.univas.jp/>
一般社団法人 大学スポーツ協会
- [3] <https://www.jleague.jp/aboutj/cultivation/>
日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)
- [4] <https://npb.jp/>
一般社団法人 日本野球機構 (NPB)
- [5] https://www.softbankhc.co.jp/press/press_release/article/21
イーキャリア NEXTFIELD
- [6] 葛西和恵 体育会所属新規大卒者の特性 - 体育会学生は企業にモテるのか? - 法政大学キャリアデザイン学部紀要 Vol.9 2012
- [7] 萩原悟一 他 大学生ラグビー部を対象とした競技活動経験と社会人基礎力の関連 2017
- [8] 小野雄大 他 わが国における大学のスポーツ推薦入学試験制度の形成過程に関する研究 2017
- [9] 都築海登 体育会学生の社会人基礎力について～キャリア教育の観点から～ 2018
- [10] <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>
経済産業省 社会人基礎力
- [11] 高知工科大学
https://www.kochitech.ac.jp/entrance_info/admission/bachelors/ao-exam.html
- [12] 高知工科大学硬式野球部